九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for the assessment of the suffering and quality of interpersonal relationships of patients with chronic pain

富岡, 光直

https://hdl.handle.net/2324/4795549

出版情報：九州大学, 2022, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：(c) The Author(s). 2021, corrected publication 2022. Open Access This article is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

（別紙様式２）

氏　　名	富岡　光直
論　文　名	The effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for the assessment of the suffering and quality of interpersonal relationships of patients with chronic pain
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　中尾　智博 副　査　　九州大学　　教授　　山浦　健 副　査　　九州大学　　教授　　鴨打　正浩

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

主論文内容の要旨：

Pictorial Representation of Illness and Self Measure(PRISM)は疾患による患者の苦悩の大きさを視覚化して評価する尺度である。本研究の目的は、苦悩の大きさの指標である自己と疾患の距離(Self/Illness Separation: SIS)が、慢性疼痛患者のかかえる負担のどのような側面を反映しているか検討することであった。また、入院治療による患者と医療、重要な他者との関係の変化をPRISMにより効果的に評価することができるかどうかについても検討したものである。方法としては、心療内科に外来受診中あるいは入院中の72名の慢性疼痛患者に、PRISMと抑うつ、不安の尺度、3種類の痛み関連の評価質問紙（簡易疼痛質問票、短縮版マギル痛み質問票、痛みの破局的思考尺度）を施行した。外来患者は外来受診時に回答し、入院患者は入院時に回答した。PRISMでは疾患に関するディスクに加え、患者にとって重要な事象と医療のディスクを配置するように求めた。入院患者の内31名は退院時にもPRISMを行った。重要な事象の中から、入退院時ともに置かれた重要な他者を特定した。自己と医療との距離(SMcS)と自己と重要な他者との距離(SSoS)を測定した。結果であるが、測定した21尺度のうち、10個の尺度はSISと有意に関係していた。これらの10尺度を因子分析し、生活障害、否定的感情、痛み強度の3因子を抽出した。SMcSとSSoSは入院時に比べ退院時で距離が短縮していた。以上のことから、申請者は、慢性疼痛患者のSISは、痛みの3側面を反映する統合的評価法であり、従来の疾患ディスクだけを置く方法に医療と重要な他者を加えることにより、対人関係の質の変化を評価する事が可能となると、結論づけた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。